

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 第 号
------	-------

氏 名 梁 青

論文題目 『新撰万葉集』の漢詩にみられる和歌的表現

論文審査担当者

主 査 名古屋大学 教授 胡 潔

委 員 名古屋大学 教授 前野 みち子

委 員 お茶の水女子大学名誉教授 平野 由紀子

別紙 1 - 2 論文審査の結果の要旨

本研究は、『新撰万葉集』の漢詩の文化史的意義を新たな視点から捉えなおそうとしたものである。『新撰万葉集』は、寛平御時后宮歌合の歌を主資料に、和歌ごとに七言絶句の漢詩が配されるという体裁をとっている。従来、『新撰万葉集』の漢詩は「和臭」の強いものとして低く評価されており、議論の中心も和歌の翻訳として正確か否かといった点に置かれてきた。それに対し、本論文では、『新撰万葉集』の漢詩に見られる和歌的要素は、和歌と漢詩の表現や技巧および発想の交渉の結果であるとした上で、『新撰万葉集』の和歌と漢詩の相関関係、中国詩と和歌の表現の異同及び影響関係などを丹念に検討し、漢風讚美時代から国風復興時代に移行する過渡期における和漢交渉の様態の解明を試みた。以下筆者の論述の概要を、章を追って述べた後に、本論文の評価を記す。

＜本論文の概要＞

本論文は、第一章から第五章よりなり、これに序章と終章が加わる。

序章では、『新撰万葉集』に関する研究の現状が確認され、和歌と漢詩の翻訳の問題に終始する先行研究の問題の所在が明らかにされた上で、『新撰万葉集』の漢詩の文化史的意義を新たな視角から考察する必要があるという提言がなされている。

第一章では、朝廷や撰闋家による公宴、私宴の場で詠まれた紫藤詩・九月尽詩・瞿麦花詩・桜花詩を取り上げ、九世紀末の日本漢詩の和歌的表現がどのような場でいかなる意識のもとで詠まれていたのかを具体的に考察している。摂政藤原基経邸で開かれた詩宴で詠まれた紫藤詩は、島田忠臣が基経の和歌好尚にあわせて詠んだものであり、白居易の紫藤詩の語句に拠りながら、藤を藤原氏に掛けてその一門の繁栄を讚美する。九月尽詩は、菅原道真が白居易の三月尽詩を万葉以来の惜秋の伝統と融合させて、中国詩にはない「九月尽」詩を創出したものである。この日本独特の九月尽詩が宇多朝の宮廷に採り入れられ、さらにその後和歌にも受け継がれ、『古今集』の九月尽の歌群として結実するのである。島田忠臣・菅原道真などの詩人はまた瞿麦花・桜花など伝統的な歌材を積極的に漢詩に取り入れながら、中国詩の「芍薬・薔薇・梅・桃・蘭」に対する「瞿麦花・桜花」の優位性を主張する。論者は、宇多朝で行われた一連の文事に関する分析を通じて、宮廷応制詩における和歌的表現の多用、公宴詩の詩題の日本化、詩歌同題の文宴の開催などは、いずれも和歌が次第に公的地位を獲得していくという文学史的動向を物語っており、公宴、私宴の場は漢詩と和歌を融合させる一つの大きな契機となることを明らかにした。

第二章では、『新撰万葉集』の漢詩に見られる古来の和歌表現の受容が検討されている。まず『新撰万葉集』四季部の漢詩に用いられている「女郎花」「萩」「藤袴」といった『万葉集』以来詠まれてきた歌材を中心に、『万葉集』と比較して分析し、これらの歌材にまつわるイメージや季節観が継承される一方、「男を魅了する女郎花」「袴に掛ける藤袴」などといった万葉歌にはない新しい表現も創出されていることを明らかにした。次に『新撰万葉集』恋部の漢詩に見られる「蕩子」「怨言」の使い方を考察し、これらの漢詩には平安朝を舞台にした男女の恋が多く描かれていること、特に心の中で恋焦がれても人に知られないように恋心を抑えるという「忍恋」の心理描写は、中国閨怨詩に見られない、和歌の恋歌に基づいた表現であることを指摘した。また「昔一今」、「昼一夜」といった対照表現は、いずれも漢詩の技巧を

別紙 1-2 論文審査の結果の要旨

用いて、和歌の伝統的発想を理知的に再構成したものであることを明らかにした。『新撰万葉集』は、『万葉集』を強く意識し、古歌の世界を基盤としながらも、その一方で古歌と対峙しつつ当代和歌の新しい「あや」を誇り、「新撰」を高らかに表明する作品であり、その漢詩もこのような「古」と「今」の二面性を持っているという見解は説得力がある。

第三章では、『新撰万葉集』の漢詩に見られる和歌の掛詞や縁語による影響が検討されている。上巻秋部 70 番では、和歌「声たててなきぞしぬべき秋の野に朋まどはせる虫にはあらねど」において、「なく(泣く・鳴く)」という和歌の掛詞の技法によって心情の叙述と物象の叙述とが重層的に詠まれている。対する漢詩もこの掛詞の技巧の影響を受け、「虫鳴一人泣」の擬人表現が換骨奪胎され、「愁人慟哭類虫声」という詩句が作り出されている。また、上巻夏部 35 番の和歌「夕去れば蛍よりけに燃ゆれども光見ねばや人のつれなき」にみられる蛍と恋との結びつきは、もとより六朝閨怨詩に新たに学んだものであるが、中国詩では「火一恋心」の比喻表現と「蛍・火・燃」の語群はそれぞれ異なる系統に属するものであり、蛍を恋心に喩える表現は殆ど見られない。上巻 35 の漢詩においては、「火・こひ・燃ゆ」の掛詞・縁語が媒介となって、「蛍・火・燃」の語群が「蛍一閨怨」と結合され、「夏夜胸燃不異蛍」という漢詩表現が練り上げられている。論者は、この二つの和歌的表現は「中国詩→和歌→本集漢詩」というプロセスを経て辿りついたものであり、いずれも言葉の連想によって独自の表現世界を構築していることを指摘している。

第四章では、『新撰万葉集』の漢詩の比喻表現の特徴が考察されている。上巻 56 の漢詩にある「紅葉の錦を衣として着る」という表現は、「衣、錦夜行・衣、錦還、郷」と「紅葉一錦」の比喻表現の結合によってできたものである。また、上巻 48 の漢詩にある「白露は卞和が地に一面に敷いた碎玉のように輝いている」は「露一珠(玉)」の比喻表現に「玉」に関連する「卞和泣、玉」の故事が詠み込まれたものである。論者は、これらの表現の結合には、中国の類書が大きな役割を果たしていると指摘する。さらに、中国詩にある「花一錦」が「紅葉一錦」に転換されていること、「月光」が「白兔」と同一視されていることについては、日本の伝統的美意識や好尚との関連に言及している。そして、このような言葉の連想によって、「人が紅葉の錦を衣にして着ている」「つららの鏡に自分の老いた姿を見ようとする」「月の光が無数の白い兔のように部屋に射し込んだ」といった、現実には起こり得ない景象を作り上げているのが『新撰万葉集』の漢詩の比喻の一つの特徴であると論じている。

第五章は、『新撰万葉集』の漢詩に見られる「郭公」と「涙河」を通じて、王朝漢詩文における『新撰万葉集』の漢詩の位相と意義について考察したものである。中国詩では、杜鵑は春の景物で、閨怨との結びつきがかなり薄い。勅撰三集と菅原道真の杜鵑詩は中国の杜鵑詩の詠み方をそのまま継承しているが、『新撰万葉集』の漢詩になると、表記は「杜鵑」ではなく、和歌と同じく「郭公」と記され、さまざまな和歌的表現が試みられ、それがまた平安後期の『本朝無題詩』などに継承されていった。また『新撰万葉集』になって初めて用いられる「涙河」に関する表現にも、中国詩の「涙如、河」の比喻表現を踏襲するのみではあき足らず、「水」に関連する言葉を駆使して新たな試みが現れた。さらに、『新撰万葉集』の漢詩によって切り拓かれた「郭公・家家」、「郭公・枕」、「郭公・鶏」の組合せや、「粉黛壞来取、涙処、郭

別紙 1 - 2 論文審査の結果の要旨

公夜夜百般啼」「枉_レ馬蹄_レ」「錦葉林」「不_レ拳_レ煙」「含_レ情泣血袖紅新」などといった日本の表現は、後世の日本漢詩文に継承されていく。論者はこれらの表現を詳細に検討することによって、王朝漢詩において『新撰万葉集』が重要な転換点をなしていることを明らかにした。『新撰万葉集』の作詩法が後世の王朝漢詩文に一種のモデルを提供し、日本漢詩の和様化に大きな役割を果たしているという主張も傾聴に値する。

終章では、本論文の各章の論点と今後の課題を整理するとともに、『新撰万葉集』の漢詩の和様化の方法を三点確認している。その第一は、「主体の置換」の方法である。日本的なものを『新撰万葉集』の漢詩に取り込もうとすれば、置換可能な中国詩の語句の存在が前提となる。中国閨怨詩では殆ど詠まれない「杜鵑」と、恋歌では重要な素材である「ほととぎす」の置き換えは、その典型例である。第二は、既存の幾つかの表現を組み合わせることで表現の拡大を図る「表現の複合」の方法である。中国詩においては本来別系統の表現が和歌の技巧によって組み換え結合されて、様々な新しい表現が生み出されたことである。第三は、中国詩の詩語に含まれる意味の一側面のみが強調され、そこから新たな別の意味が派生してくる「意味の転形・変形」の方法である。

<論文の評価>

本論文は、従来の研究においては看過されてきた漢詩の和歌的要素に着目し、日中両国の文学資料を駆使し、中国詩、日本漢詩、和歌の用例を丹念に調査・分析して、『新撰万葉集』の漢詩の和様化する過程を具体的に、説得力を持って論証した労作であり、多くの優れた新見を示したことは、高く評価されるべきである。

その一方、個別作品の分析に力点が置かれすぎて、作品の全体像に関する把握が十分とは言えないところがある。例えば、第一章で言及されている「公宴」と「私宴」の概念が明確とは言えず、議論も十分に掘り下げられていない点が憾まれる。また『新撰万葉集』の成立期の問題についてもより緻密な論考が必要であること、先行研究を超えた、論者自身による用語の概念規定をさらに精密にする工夫が必要であることなどの指摘が審査員からなされた。もっとも、これらの指摘は論者の研究のさらなる進展によって解決されるべき課題であり、本研究の価値を否定するものでは決してない。本論文でなされた調査・分析により得られた成果は、間違えなくこれまでの『新撰万葉集』の研究、和漢比較研究に有意義な知見を加えた。以上の理由から、審査員一同、本研究は博士學位論文として十分その水準に達していると判断した。